



砂川市における『砂川みまもりんく(地域包括ケアネットワークシステム)』の構築

砂川みまもりんく

砂川市立病院地域医療連携室
審議監兼地域医療連携課長

山田 基

『砂川みまもりんく』とは、砂川市立病院の医療情報などを市内の医療機関・介護事業所等で共有する砂川市地域包括ケアネットワークシステムの通称名です。このシステムを活用し、質の高い、切れ目のない医療・介護サービスを提供することを目的としています。

1. 『砂川みまもりんく』構築から稼働までの経過

砂川市は、札幌市と旭川市の間にあり、平成28年度末の人口は17,406人、高齢化率37.1%の小さな街です。市内には地域の基幹病院である砂川市立病院と精神科の砂川慈恵会病院の2カ所、診療所は6カ所（在宅支援診療所は0）、訪問看護ステーション1カ所（24時間対応は0）、介護事業所等は、特養1カ所、老健1カ所、居宅介護支援事業所6カ所、訪問介護ステーション5カ所などと社会資源が非常に少なく、またマンパワー不足も顕著な地域です。

この少ない資源の中で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、より緊密な医療・介護連携を考えなければならない状況となりました。砂川市立病院としても地域完結を考え、地域における包括的な在宅医療・介護ケアに対し、関係機関が連携を図りながら、今後迫り来る超高齢者社会での地域住民への医療提供、介護ケアの在り方を考えることを目的に「地域で在宅・介護ケアを考える会」（以下「考える会」という）を平成25年11月に発足しました。

この会の発足に関して、当時の小熊院長（現在の事業管理者）は、「急速な高齢化が医療の現場でも避けられない状況になるのは明らかであることから、いつまでも最終場面が病院になってしまうのが心配である。当院は急性期病院であることもあるが、当院での機能だけでは、今後の対応が難しくなっていく。そういう意味でも、皆が危機意識を共有し、この会の中で、意見を出し合い、なんとか打開していきたい。そのためには、医師も入った中で協議する必要がある」という考え方だったようです。なお、考える会については5回開催した後に、協議を公的な会議である地域包括ケア会議に移行し、医療と介護の連携を進めていくことになり、その役割を終えています。

考える会では、地域包括ケアシステムの構築に向けて、現状把握、課題整理、情報共有、連携強化などを協議することになり、在宅療養部会、システム部会を設置しました。最終的には医療・介護資源の少ない地域であることや、マンパワー不足を補うため、また地域包括ケアシステム構築のための第一歩として、情報共有のシステム化が必要という結論となり、砂川市および砂川市立病院が中心となってシステムを構築していくこと、また、構築に向けては多職種でいろいろな意見を出し合いながら詳細を詰めていくことになりました。

ネットワークシステムは平成27年3月に構築され、同年11月の本稼働までの期間、内容整理、同意取得方法、説明会実施、参照機関へのシステム設定、運営協議会の設立など数多くの課題を協議しました。

2. 『砂川みまもりんく』概要

『砂川みまもりんく』は、富士通製のHumanBridgeを使用しており、クラウド上にネットワークを構築し、地域の医療・介護の一体化を支援するソリューションです。イメージとしては、電子カルテの情報を市内の医療機関（医科・歯科）、調剤薬局、訪問看護ステーション、介護保険施設、介護保険事業所、地域包括支援センター、ふれあいセンター、消防、市介護福祉課などがリアルタイムに参照できるようになっており、現在では市外の医療機関、近隣市町などにも情報を提供しています。

○セキュリティ

情報は、データセンターを通して提供し、厚生労働省の提示する「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン」に準拠しています。

当院とデータセンター間は、高度なセキュリティが確保されたIP-VPNを利用しており、また、参照機関とデータセンター間もInternet-VPNを利用し、高度なセキュリティを確保した連携を実現しています。

○診療情報参照イメージ

情報は、最初の画面から、患者情報、病名、処方歴、検査結果、各種記録・レポートなどを容易な操作で参照することができます。また、メモ機能を利用し、参照機関から患者情報を登録することもでき、市立病院の医療情報のみならず、かかりつけ医の情報、訪問看護時の情報、服薬管理の情報などを共有しています。



診療情報参照イメージ（電子カルテ情報）



○参照医療機関・介護保険事業所等

参照機関の数は、平成29年4月末現在で医療系（病院・診療所・歯科医院・調剤薬局・訪問看護ステーションなど）26カ所、介護系（施設・居宅介護支援事業所など）18カ所、その他（行政機関・地域包括支援センター・消防など）5カ所の合計49カ所となっています。また、同意登録患者数は、約1,081人となっており、徐々に増えてきている状況です。

○利用状況

当初は診療所などが多く利用するものと考えていましたが、少し想像とは違い、参照件数の1位は居宅介護支援事業所、2位地域包括支援センター、3位訪問看護ST、4位調剤薬局、5位特別養護老人ホームとなっており、介護系の事業所等が多く利用しているところが特徴だと思っています。

○利用者から

参照機関に利用方法を聞いてみると、通院時・救急外来受診時の状況、受診予約、入院中の経過、退院時期、IC内容、服薬状況などの確認が大半を占めており、他にはケアプラン作成やカンファレンスの準備などがあげられ、一番参照されているのは医師の記載でした。また、利用者からの意見では①適時制、②効率化、③正確性—などがあげられ、①では「24時間知りたい情報をタイムリーに取得できる」②では「問い合わせ時間の減少」「カンファレンス時間の短縮」「通院経過等が確認でき、診療がスムーズになった」③では「高齢者や認知症患者などからの聞き取りで本人や家族が説明できなかったことが確認できる」「内服薬や外用薬の部位確認など薬の確認ができる」—などが挙がっていました。

○費用

システム構築は、医療介護総合確保基金を活用した患者情報共有ネットワーク構築事業補助金を受けています。補助金については、北海道保健福

祉部より、当院のシステム構築に係る費用および砂川市が参照機関に無償で貸し出すパソコン等の購入費用の2分の1を補助していただきました。これにより、参加機関には無償でパソコン等を貸し出すことができ、ネットワーク構築について追い風となりました。

○課題

システム上の課題は、登録患者および参照機関を増やすこと、また介護情報（認定情報・サービス利用状況・担当ケアマネジャー）や検診情報（特定健診・がん検診など）、地域でのリハビリ情報、施設や在宅での生活状況など市立病院以外の情報の共有、他のネットワークとの連携などとなっています。

利用方法の課題は、医療職と介護・福祉職の共通理解、消防での利用（DNAR患者）、モバイルでの対応、機能の充実などとなっており、今後も定期的にアンケート調査を行いながらより良いものにしていきたいと考えています。

3. 要望

要望という点では、やはり費用の問題が一番だと思っています。システム構築時は補助金を活用できますが、ランニングコストは対象外です。また、更新時は補助金の対象となるかどうか分からない状況です。

利用している医療機関にはもう少し診療報酬の点数を増額していただきたいですし、介護との連携を考えると、地域支援事業の一つとして認めていただくことや、介護報酬の点数にも反映させていただきたいと考えます。

4. まとめ

『砂川みまもりんく』を構築するにあたり、地域の中の多職種の方々と数多く協議させていただきました。最初は、「急性期病院である市立病院は敷居が高い」「地域のことが何も分かっていない」など厳しい意見が出ていました。そういうこともきちんと話をしてお互いに理解し合い、また協議を重ねるごとに信頼関係ができあがり、システムだけではなく、顔の見える連携（医師会の方が言っていた「腹の見える連携」）につながり、今では財産なのではないかと感じています。

今後、限られた医療・介護資源を有効的かつ効率的に活用していくために、この『砂川みまもりんく』を利用し、市立病院、行政、医療・介護関係者などと協力し、地域包括ケアシステムを構築したいと考えます。